

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

同時通訳の世界

著者	長沼 美香子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	68
号	1
ページ	9-10
発行年	2018-04-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002207/

同時通訳の世界

長沼 美香子

学長としての船山仲他先生については、本誌読者の皆さんの方が私よりもよくご存じではないかと思います。ここでは別の横顔を紹介することで、私からのささやかな送辞とさせていただきます。

同時通訳者としての船山先生（の声）との出会いは、もう四半世紀も昔のことです。当時の私は駆け出しの通訳者で、憧れの同時通訳ブースから発せられるその声には、何とも言えない神々しい響きが宿っていました。

では、船山先生ご自身と同時通訳との出会いは、どのようなものだったのでしょうか。

His eureka moment went something like this:

“Simultaneous interpreting? No way!”

Chuta Funayama, president of the Kobe City University of Foreign Studies, smiled warmly as he remembered the first time that he became aware of the concept that would come to define a large part of his professional and personal life.

“I was a young high school student, and the very idea of translating from a source language to a target language, in an instant, seemed impossible,” he said.

“But there lay the attraction. I was hooked.”

これは、*The Japan Times* (2012 年 2 月 20 日付) に掲載された船山先生のインタビューの冒頭です。同時通訳に対する高校生らしい素朴な驚きを端緒として、その魅力にすっかり「はまってしまった」と語っておられます。多感な青春時代に同時通訳と運命的に出会った経験が、その後の人生に大きな影響を与えたわけです。ちなみに、同時通訳の世界に魅せられつつ、テニス部でもご活躍だったそうです。

その後船山先生は、かつて自らが不可能とさえ思った同時通訳の技術を極めたばかりでなく、その神業的（と思われる）行為がなぜ可能なのかを理論的に解明しようと取り組まれてきました。

一般的に通訳者は黒衣のような存在だとよく言われます。その場にいないかのような透明な通訳を理想とする見方もあります。また外国語に堪能であれば、誰でも通訳ぐらいはできるとの誤解もあります。

通訳という行為の歴史は古く、紀元前にまで遡る記録も現存しますが、通訳そのものが学術研究の対象となったのは最近のことです。世界的に見ても「通訳学」(Interpreting Studies)は、20世紀後半になってやっと始まった新しい学問分野なのです。そのような状況にあって、船山先生は同時通訳プロセスの認知的側面に焦点を当てた言語学的研究によって、黎明期から現在に至るまで学界を牽引してこられました。自らの実践経験を踏まえた問題意識を出発点として、言語学の知見を通訳研究に応用した理論的かつ実証的な研究です。

同時通訳の現場も経験し、大学の教壇にも立ち、言語学徒でもある筆者が果たし得る役割の一つは、同時通訳の全体像をできるだけ客観的に描き出し、同時通訳の適切な、バランスのとれた認識のための材料を提供することにあると考える¹。

この論文が書かれたのは1985年ですが、船山先生の研究姿勢を端的に示していると思います。このような発言が80年代の通訳研究において、いかに斬新なものであったか。日本通訳学会の前身である通訳理論研究会の設立が1990年(同学会は2008年に日本通訳翻訳学会と改称)ですから、船山先生は前人未踏の道を先頭に立って切り拓いてきた先駆者の一人です。

同時通訳者のオンラインでの発話理解に関して、「認知ファイル」(cognitive file)や「概念的複合体」(conceptual complex)など独自の記述装置を提唱して、船山先生は通訳理論の発展に寄与されました。さらに、日本時事英語学会(現日本メディア英語学会)の会長(2001-04年)、日本通訳翻訳学会の会長(2010-13年)なども務め、幅広い学会活動の中で多大な指導力を発揮されたことも追記しておきましょう。

さて、輝かしい足跡を残された船山先生ですが、その内面の深層にややミステリアスな秘められた部分を時折感じるのは私だけでしょうか。通訳者の認知活動はとても複雑なブラック・ボックスであり、解明されていない事象もまだまだ残されているということなのかもしれません。

¹ 船山仲他(1985)「同時通訳の諸側面」『視聴覚外国語教育研究』第8号, pp. 49-66.